

「神はイエスを主、メシアとなさった」

2016年02月19日

使徒言行録 2 章 29 節～36 節。「兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあり、はっきり言えます。ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。そして、キリストの復活について前もって知り、／『彼は陰府に捨てておかれず、／その体は朽ち果てることがない』／と語りました。神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。ダビデは天に昇りませんでした。彼自身こう言っています。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着け。わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで。」』』だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」

ペトロは、ダビデと主イエスの質的な違いを語っている。イスラエル人はダビデを理想の王として尊敬していた。ダビデは戦いの勇士で、イスラエルに隆盛をもたらし、また、神を畏れる信仰に生きた王であったからである。そのダビデは死んで葬られ、墓は私たちの所にある。彼は陰府に下り、朽ち果てる人間であった。しかし、ダビデは預言者でもあったので、彼の子孫の一人を王位に着かせるという神の誓いを知っていた。また、キリストの復活についても知っており、詩編 16 編 10 節で「彼は陰府に捨てておかれず、その体は朽ち果てることがない」と預言している。ダビデから生まれる子孫の一人がメシアとなる。メシアは陰府に捨て置かれず、体は朽ち果てることなく復活する。神は、ダビデが預言した主イエスを復活させた。ペトロは、私たちは皆、主イエスの復活の証人であると力説している。このような論述は、現代の聖書学から見れば、承服できることではないが、当時は、このような飛躍した考えがまかり通っていたのである。

ダビデは人間であるから、天に昇らなかったが、ダビデ自身が昇天した主イエスについて「主は、わたしの主にお告げになった。『わたしの右の座に着け。わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで』』」と言っている。引用された聖句は詩編 110 編 1 節で、王位に着いた王の威光をほめたたえる言葉である。この論述も、今日の聖書学からは納得できない。彼らは旧約聖書の言葉を自由に用い、ロマンと壮大な夢に溢れて語っている。ペトロが言わんとすることは、主イエスは神の右に座し、全ての敵を足台として征服された、即ち、罪と死に勝利して復活されたということである。復活した主イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を神から受け、それを私たちに注いでくださった。あなた方は今、その聖霊降臨を見聞きしている現場にいると訴えている。ペトロは結論として「だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです」と締めくくっている。

キリスト教信仰は、ペトロの説教に骨子がある。十字架で殺されたナザレのイエスを、神は復活させ、主、メシア（キリスト）となさった。十字架の死と復活の命によって、罪と死を滅ぼし、神の命を啓示された。イエスを主キリストと信じる者に罪の赦しと復活の命に与る救いを与えてくださる。